

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 10 月 1 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・特定助教
氏名	岸田 拓士

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
タンザニア・アルーシャ、ンゴロンゴロおよびザンジバル
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
熱帯生物多様性保全に関する国際ワークショップとフィールド視察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 9 月 20 日 ~ 平成 26 年 9 月 30 日 (11 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の渡航では、タンザニアのアルーシャで開催された熱帯生物多様性保全に関する第 3 回ワークショップに参加した後、ンゴロンゴロ保全地域およびザンジバルで野生動物のフィールド視察を行った。</p> <p>ワークショップでは、地元タンザニアの野生動物の現状を学ぶことができた。特に、ライオンが現在もなお人家を襲撃する話は、脅威のレベルこそ違え、日本でも時折人里にクマが出没するように、野生動物とヒトとの距離の取り方の難しさを考えさせられた。</p> <p>ンゴロンゴロ保全地域では、クレーター内部の平野を車上から視察した。シマウマやガゼル・カバなど動物園でおなじみの多くの動物の野生の姿をうかがうことができた。特に、平原の果てまで連なるヌーの群れの移動の様子は圧巻であった。クレーターの外輪の稜線に立つと、クレーターの内部を容易に一望できる。外輪山によって周囲と隔離された生態系でありながら、この程度の広さのクレーター内部で、これほど多数の大型動物が持続的に維持されていることは驚きである。サバンナの生産性は私が思っている以上に高い、ということなのだろう。</p> <p>ザンジバルでは、野生のミナミハンドウイルカを船上および海中で観察した。およそ 20~30 頭から成る群れと遭遇することができ、満足のいく観察を行うことができた。だが、地元のイルカウォッチング業者の質が悪い点を指摘する必要がある。我々の船を含めて、同じイルカの群れに 4 隻のウォッチング船が集まったが、どの船もイルカの群れの真横で客を海に入れようとする。おそらくは船頭がイルカの群れの動きを考えない(考える気が無い)からなのだが、これではまだ船が動いている間に真っ先に飛び込まないとイルカを海中で観察することはできない。それに、ヒトが海を泳いでいても、他の船は容赦なくイルカを追いかけまわすので、非常に危険である。実際、私も一度遊泳中に他の船にぶつけられた。この方法よりも、イルカの群れの進路を読んで、その進路に先回りして客を落とす方が、ヒトにとってもイルカにとってもはるかに安全である。その後、ザンジバル海洋研究所にて話を伺った。ザンジバルでもイルカウォッチングのルールは策定されていること、およびそのルールを順守するまともな業者もいる、とのことだった。だが、悪貨は良貨を駆逐する。違反者に対する効果的な対処が、至急必要であろう。</p> <p>本渡航では、野生動物が豊富に生息するタンザニアの実情を知る上で非常に良い機会となった。本渡航に際してお世話になった全ての関係者の皆様に感謝します。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



休憩中のヌーの群れ。ンゴロンゴロクレーター内部にて



外輪山から見たンゴロンゴロクレーター全景

6. その他 (特記事項など)